

孤山智円の三法各具三千説について

弓 場 苗 生 子

宋代天台宗において展開された山家山外の争いは、山家派（四明派）の領袖である四明知礼と錢塘を拠点とする山外派の

学匠らとの間の論争に端を発するものである。今回扱う孤山智円は、その師である奉先源清とともに、山外派の主たる論客として知られている。⁽¹⁾しかしながらその所著を閲するに、心・仏・衆生等の諸三法に対してその各々に三千差別法の義を説き、三法が平等に三千を具有することを以て円融とする、所謂各具三千の説がしばしば依用されていることに気づかされる。このような智円の所釈は論争の当初知礼がその清浄真如義への傾倒を批判した源清らの教説からさらに進んで、山家派の三法各具三千の立場を取り入れつつ師承の説との整合を図ったものとも言えるだろう。ただし当然のことながら、智円が知礼と同様に各具三千の義を取るとはいっても、その各具を成り立たせる理論的根拠には大きな異なりがある。すなわち、山家はその当体全是の理解に基づき、眼前の色法それ自体にも三千差別が具わるとする、色具三千の義を説く。これに対して、智円は心性が三法に遍在することを前

提に、飽くまでも心具の観点に依拠して各具三千を明かし、色法そのものには三千法は具わらないと強調するのである。

知礼の高弟であった雪川仁岳は後年門下を離脱して山家批判へと転じ、同じく山家の門に出ながらも知礼の教説を論難した神智従義と合わせて後山外派とも称される。これらの両師は三諦相即の観点から各具三千を説くことは認めつつも、基本として三千差別は仮諦の範疇のみに限定すべきであると提起するに至ったが、そこにおいては智円の色不具三千の判釈についても批判対象とされていることが注意される。小稿では、智円による三法各具三千説が山家派および後山外派の立場とどのように相異するものであるかを考察し、これを通して山家山外論争における三法円融に対する理解の変遷を検討することを目的としたい。

まず初めに、知礼の所述に基づき山家説における三法各具三千の義を確認したいと思う。『十不二門指要鈔』は山外派の源清による『十不二門示珠指』の後に著わされ、この書においては『十不二門』本文の随文解釈に留まらず源清の所釈に

対する論難も広く展開されている。次に引く巻上の箇所においては、心・仏・衆生の三法にそれぞれ三千法が具わることを明かすとともに、源清らによる一性義への偏重を批判する。

三法体性各具三千本来相摂、前雖解了心摂一切、今觀称性包摂灼然。故是則下、先明「内心融於外法」。既云「互摂」、生・仏亦然、故十方下、次明「若生若仏各自遍融」。又此性体非謂一性、蓋三千性也。以「仏具三千」「方摂二心・生」、生具三千「方融二心・仏」。心具三千、「豈隔二生・仏」。若心無「仏性」、豈能摂「仏」。仏無「生性」、何能摂「生」。故性体無殊之語有「誰不知、一切咸遍之言須思深致」。他解唯論「融外攝内名不二者、一何局哉。一切咸遍、如何銷之。況余九門皆攝二辺、全傷大体」。

ここにおいては性体を三千の性を指すと位置づけた上で、心・仏・衆生各々が同一の三千法を具えることを根拠に三法の互具・互摂を説く。さらに続けて「融外攝内」と表わされる山外派の摂相攝性の理解を斥けていることから、知礼における三法各具三千義が山外師の一理随縁説に対する反論としての意義をも有していたことが窺われる。

知礼によるこのような批判を受けて、智円の所釈においては他宗の清浄真如義との相異を積極的に明かし、自らの取るところが知礼の言う「偏指清浄真如」の説に当たらないことを示す例が間々見える。『金剛鉤頭性録』巻一では他宗の唯識説との違いを明かして次のような問答を立てている。

問。輔行既云、非「但唯識」、亦即唯色。今若謂「全色是心方云三具法」、何殊「他宗但云三唯識」邪。
答。今家既明「心性具足諸法」、諸法偏摂、不「隔」於色。故得「円転而談」、乃云「唯色唯香等」。只由「色香全是心性本具」故也。他言「唯識」、但得「心生之義」、故無「唯色等言」。義例云、他人雖云「一切唯識」、不「了」身土居「于一念」。

ここでは心性が随縁して諸法を生ずるのみならず、心性のうちに諸法が本具されていることをも説くという点を以て他宗義との相異とし、今の意が単なる随縁真如義とは異なることを強調する。山家説において性具義が重視されることは前の引用からも見て取れるところであるが、智円もまた具義の説・不説によって天台教学の優越を明かすのである。この他、別の箇所においては心・仏・衆生の三法について各具三千を釈義する。

毘盧下、次、二句別示「彼彼衆生心具三千」。……今了「已心所具三千偏」彼生・仏心中所具三千。是以言「我三千摂無不」尽。……当「知」、心・仏・衆生三無差別、是一家觀道之綱格、諸文円解之指帰。名雖「有」三、義不「出」二。何者、以「已望」他、他名「生・仏」、已從「的示」、故名為「心」。他生望「已」、已還名「生・仏」。对余「只是生・仏」。又復応「知」、各具三千者、須「言」已心・衆生心・仏心各具三千也。何者、自己依正及生・仏依正、皆由「三心造」故、皆由「三具」故。……不「二門」云、三千同在「心地」、与「仏心地」三千不「殊」。皆須「指」心方裨「觀」道。

ここで注意されるのは、智円は知礼と同様に各具三千の義を明かすものの、心・仏・衆生のうち心法のみを自己に、その他の二つを他に配した上で、さらに各具三千を「己心・衆生心・仏心」と飽くまでもそれぞれの心について説いている点である。つまり智円においての各具三千とは、三法各々が心具备え、心から生じていることによって可能となるものであることが知られる。このように心法に対する編重は認められるものの、心性に三千法が具わるとする智円の釈は、一見理性に三千が具わることを説く知礼の義と実質的にそう変わるものではないようにも思われるが、智円はこの直後に山家説への批判をも併せて展開している。

他人不_レ解_三皆本_二於心_一、雖_レ云_下不_三但心造_三三千_一、生・仏亦造_中三千_上、不_レ知_三皆指_三生・仏心_一也。又云、国土自具三千_一。不_レ知_三国土全是心_一。故此乃正同_三下文迷者謂_三草木瓦礫各一因果_一也。若了_三有情心偏性遍_一、則無情仏性、無情成仏、炳然易_レ見。請、祛_三情滯_一、細_レ讀_三斯文_一。

ここで他人として論難されるのは、知礼の教説を奉ずる山家派の学匠らを指すと考えられる。これらの者たちはたとえ各具三千義を明かし、心が能造となつて諸法を生ずるのみならず仏と衆生も能造となり得ると説いたとしても、これらが心具を前提として成り立っていることを知らず、剩え無情である国土のうちに三千法がそのままに具わっているとまで曲

解しているとして破斥するのである。また卷一の箇所においても同様に国土自具三千を説く他師の見到言及している。

……故又云、一塵一心即一切生仏之心性等。豈非_四皆談_三有情心偏具三千_一邪。是故止観発心明_下揀_三草木精要及以肉団_一唯取_中慮知之心_上、至_三乎正観妙境_一仍指_三識心_一。記文又云、以_レ生顯_レ具。若国土自具三千_一者、草木瓦石応_レ有_三心生_一。此則正同_三大經所_レ破、凡夫衆生謂_三仏性離_レ陰而有_一也。況一代大乘唯談_三心性_一。故云、凡有_レ心者皆當_三作_三仏_一。又云、三界無_二別法_一、唯是一心作。又云、雖_レ説_三無量諸法以爲_三仏性_一、然不_レ離_三陰界入_一也。是以聖記罔_レ沾_三於瓦石_一、不_レ輕唯礼_三於衆生_一。一家円修唯観_三識陰乃至九境_一、皆名爲_レ心。如_レ云_三煩惱心病心業心等_一。伐_レ樹得_レ根之喻、良可_レ信哉。囑_三斯聖言_一而猶迷者、深可悲也。

ここに「若国土自具三千_一者、草木瓦石応_レ有_三心生_一。」とあることから、智円は慮知之心を持たない草木瓦石が三千法の能造・能具となることを認めていないことが知られる。しかしながら、智円の立場としては決して無情仏性義を否定するものではなく、有情の心性が一切諸法を遍く生み出し、かつその内に摂めるために、その所造・所具の法である無情もまた心性に他ならないということを根拠にこれを認めるのである。この他、同書卷三には次のように説かれる。

復由_三現在妄心所執_一故、此依正全是無明。故占察云、一切法皆不_三

自有^レ、但依^レ妄心分別^レ故有^レ。又云、一切諸法皆從^レ妄想^レ生、依^レ妄心^レ為^レ本。今若^レ達^レ至^レ妄心^レ無^レ自性^レ故、由^レ理本具^レ方有^レ事用^レ故、是故即^レ心之言、該^レ真妄^レ也。當^レ知、諸文凡言^レ唯色唯香等^レ、其意皆爾。只由^レ色香皆由^レ心造^レ故、心性本^レ具色香^レ故、所以色香即^レ心。心外無^レ法、故言^レ唯色香等^レ。他味^レ由^レ心之旨、便謂^レ草木自具^レ。悲哉、傷哉。

ここに見えるように、山家の学徒が草木そのものに直接に三千法が具わると説くのは異なり、智円は色法に対して心性が能造であり能具であるという前提の下に「由心」の立場を取る。すなわち、所造・所具である色香等の生起は心性に由来し、あるいは唯色・唯香等とも説かれるのは色香と心性との相即に基づき明かすものであって、心性を言わば經由することではじめてこのように説き得ると述べるのである。

後年、後山外派の仁岳・從義の両師は空・仮・中の三諦において三千差別法の義を仮諦のみに限定し、空・中二諦は原則として無相であるとする唯仮三千の説を主張した。仁岳の「三千書」において、長水子璿の言葉を引きつつ山家説を批判して「殊不^レ了^レ、三千是所立之法。將^レ所立之法^レ作^レ無住之本^レ、璿師所破除^レ無明^レ有^レ差別^レ、但有^レ具義^レ而無^レ即義^レ、以^レ不^レ説^レ差別法即^レ一真^レ故。誠哉、是言也。」と論ずる如く、両師においては三千法が無住之本に対して所立であることを踏まえた上で、一の真如と衆多の三千法との間に存

する一多の相即関係が強調される。また、仁岳の『十不二門文心解』においては、三千世間を心具のみとすべきか、或いは色にも具わるとすべきか問を立てて解釈する例が見える。

一念者、能造之心也。三千世間者、所造之法也。在^レ理則心性本具、在^レ事則因緣所生、即空故一相不^レ存、即假故諸法皆立、即中故妙絶無^レ寄。……

或問、三千世間為^レ只心具^レ、色亦具耶。

答曰、心性即色、色性即心、心色一如、無^レ復別体^レ。彼彼法界、何局^レ唯心^レ。故四念處云、非^レ但唯識^レ、亦乃唯色唯声唯香唯味等。又輔行云、從^レ事則分^レ情与^レ非情^レ、從^レ理則無^レ情・非情別^レ。是故情具^レ無情^レ亦然。當^レ知、色心不^レ出^レ三千^レ、三千但是俗諦。若論^レ互具^レ、並由^レ即^レ真。故記云、俗則百界千如、真則同居一念。……心為^レ造法之本^レ、譬如^レ画師之手^レ。故諸教所明具法、多指^レ歸^レ心。往人未^レ明、乃生^レ異執^レ。

答釈においては、色と心とを平等の両辺と位置づけた上で心の一方のみに偏向すべきでないとし明かし、さらに続く部分では色・心をいづれも俗諦たる三千法の撰に配した上で、これらを合わせて真諦の一念と対照させている。智円による各具三千義が心性による該撰を根拠として成り立つものであるのに対し、仁岳がここにおいて心を俗諦に属しながら、一念と三千法との真俗二諦相即を明かしていることは注目に値する部分と言える。

知礼が三法各具三千説を明かした背景には、源清らにおけ

る一性義への偏重を識める意図があつたものと考えられる。これを受けて智円は山家派と同じく性具義を以て円教の玄旨と位置づけ、三法各具三千の説を心具の観点から撰取するに至つた。そこにおいては、草木等の色法自体が三千法を具え、とする山家派の解釈を併せて批判し、これらの無情に三千法が具すると説くのは飽くまでも唯一の心性を経由することで可能となるのであると主張される。三法各々に等しく三千法が具わることを以て当体全是の相即を明かす山家派の性具思想は、ともすればごく安易な教学理解に陥る嫌いを存し、智円における色不具三千の解釈はこのような問題点を回避するために提示されたとも称し得る。のちに後山外派の仁岳・従義によって智円の心具・色不具の釈もまた偏頗の説として斥けられることとなつたが、ここにおいては三法の円融相即義を前提とする唯仮三千の説が併せて明かされていることが注意される。⁽¹⁰⁾これはすなわち、両師による唯仮三千の開説に対して智円の所釈が過渡的な役割を果たしたことを示すものとも言えよう。

- 1 智円の教説について扱う先学の研究としては、安藤俊雄『天台性具思想論』（法蔵館、一九五三）、陳英善『天台性具思想』（東大図書公司、一九九七）、呉忠偉『宋代天台仏教思想研究』（宗教文化出版社、二〇一七）、楊惠南『孤山智円』『金剛鉤顕性

孤山智円の三法各具三千説について（弓 場）

録』中的山外主張——色不具三千——」（『中華仏学学報』第一九号、二〇〇六）等がある。

2 大正四六・七一二頁下。

3 統藏二一五・二五六丁左下。

4 統藏二一五・二五四丁左上下。

5 統藏二一五・二五四丁左下。

6 統藏二一五・二五六丁右下（左下）。

7 統藏二一五・二七一丁左上下。

8 『山家義苑』卷上所引、統藏二一六・一八三丁左下。

9 統藏二一五・八七丁左上下。

10 従義は『止観義例纂要』卷六において三処具法を釈するに当たり、智円の色不具三千説を評して「孤山但約三心具一釈之、此与三清凉所立漸頓心具一何異。嗚呼、清凉尚知三心具一、而孤山但論三心具一。可レ不レ悲哉。淨名疏云、一切法趣レ色、即是色中具三十界法一、如三如意珠具一切宝一。宜三熟思レ之、無レ謂三心具色不具一也。」と述べる。（統藏二一四・三八〇丁左下）ここに引かれる如意珠の喩は、従義が唯仮三千の前提となる三法の不思議相即を明かす時にしばしば用いるところでもある。このことに関しては弓場苗生子「後山外派説における相即の譬喩」（『印度学仏教学研究』第六〇巻第一号、二〇一一）を参照されたい。

（キーワード） 金剛鉤顕性録、色不具三千、四明知礼、雪川仁岳、神智従義

（天台宗典編纂所）